

師走を迎えた12月1日、暗闇に包まれた本郷地区の知覚辺川右岸の畑地に、イルミネーションが浮かび上がりました。熱気球やトナカイ、雪の結晶など、手作りとは思えない光の芸術です。車を止めて眺めるカップル、笑顔で写真を撮る散歩中の親子連れなど、寒空の中でぬくもりを感じる空間が広がります。イルミネーションを灯して今年で32年。森本さん夫妻を訪ねて話を聞きました。



本郷で手作りイルミネーションを灯す
 もりもと くに お
森本 国男さん(80歳)
 せつこ
節子さん(75歳)

電飾で町を元気に

「我が子のために外で灯したのが始まりです」。最初の作品は、高さ約8mのツリーでした。無邪気な笑顔が国男さんのやる気を導き、デザインも凝るようになりました。上士幌町で見た熱気球、テレビに映った蒸気機関車など、設計図に書いて模型を作り、針金で形を作ります。小遣いのために模型の材料や電球を調達するのに、毎年、数万円ほどかけるそうです。イルミネーションの数が増えるにつれて、近所の評判も広がりまし

た。「子どもの成長に合わせて辞めようと思ったけれど、皆さんが楽しみにいてくれてるので辞められなくなりまして」と国男さんは笑いました。今年も、新たにテレビ塔(高さ約7m)が加わり、イルミネーションの規模は長さ約30m、使っている5色のLED電球は約8500個です。センサーが作動して日没から4時間自動で光り、1月31日まで点灯します。「居間の窓から見ても、心が和らぐのよ」と、作

業を手伝う妻節子さんは、穏やかに語ってくれました。「お父さん、親子で写真撮っているわよ」、「車を止めて見てくれるみたい」。節子さんの言葉に国男さんは笑顔を浮かべます。マスコミにも取り上げられ、町外からの見学者も増えました。「新聞の掲載記事を持参して、わざわざ室蘭市から来た人もいました。笑顔を見ると、続けて良かったなと思う」と国男さんはほのかに微笑みました。夫婦で灯すイルミネーションには、厚真町を元気にしたいという願いが込められています。「2年間、心を癒されました。ありがとうございます」。仮設住宅から引越す人に言われた言葉が、夫婦の大切な思い出に加わりました。



あなたにとっての
 愛すべき厚真を投稿してください



フェイスブック
 @atsumatownhokkaido



インスタグラム
 atsumalovers

ハッシュタグ#atsumaloversをつけてフェイスブックまたはインスタグラムに投稿してください。

ATSUMA LOVERS